

KOBEの本棚

— 神戸ふるさと文庫だより —

第 82 号 平成 28 年 3 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



メリケンパークの夜景 神戸市「神戸フォトコレクション」より

一千万ドルの夜景

日本新三大夜景にも選ばれ、現在「一千万ドル」と称される神戸の夜景。戦前の資料では「百萬の燈火一時に明滅する」という表現が見られます。昭和二十八年発行の『神戸観光案内』等のガイドブックでは「百万ドル」という譬えが使われました。『輸送奉仕の五十年』（阪神電気鉄道昭和三十年）にあるように、電力会社の副社長が六甲山から夜景を見下ろし、阪神間の電灯代が月に三億円、まさに百万ドルになる、と発言したことも一要因となつてこの頃は「百万ドル」が深く浸透していました。『兵庫県観光便覧』が発行された昭和四十八年頃からは「一千万ドル」という表記が増え、実際の電氣代を六甲摩耶鉄道（現六甲山観光）が試算し、平成二十二年「一千万ドル」と胸を張れる結果も得ました（神戸新聞二〇一〇・九・十九）。

一方、昭和三十三年、まやケーブルル山上駅近くに「千万弗展望台」が建設されており、いつ頃から「一千万ドル」と呼ばれ出したかは定かではありません。しかし、何ドルであっても神戸の夜景は昔から人々の心を打つ輝きであると言えそうです。

阪神間近代文学論—柔らかい個人主義の系譜 河内厚郎（関西学院大学出版会）

大阪と神戸の間に位置する尼崎、川西、西宮、伊丹、芦屋、宝塚あたりには「阪神間モダニズム」と呼ばれる独自の文化がある。伝統とハイカラとがうまく共存し、開放的な明るさの中に一種の陰影を漂わせている。地理的な「見晴らし」「風通し」の良さも独特の空

気感や住民気質の一因となった。谷崎潤一郎をはじめ、村上春樹など阪神間で暮らした作家の作品には、この地の空気を感ぜさせるものも多い。

文学に止まらず、芸術やファッション、建築の分野まで考察する。



南京町と神戸華僑 吳宏明・高橋晋一編著（松籟社）

華僑が神戸に渡って来たのは一八六八年の開港直後。その居住地の一角に自然発生的にできた市場が南京町の始まりである。神戸を代表する観光地となった現在までの歴史を詳しくたどる。また、華僑と日本人が共に創り盛り上げてきた春節祭などの行事を紹介する。関係者の座談会・インタビュー記事もあり、南京町で生きてきた人々のこれまでとこれからを伝えている。

和田神社と和田岬 杉島威一郎 和田神社

神戸市兵庫区の和田岬に鎮座する「和田神社」。本書は、神社と和田岬の歴史についてまとめたものである。第一章「和田神社小史」では、大洪水により漂着した祠を祭ったとされる神社創設から造船所建設に伴う移転まで、史料に基づき詳しく解説されている。続く第二、三章では、和田岬における「へび信仰」の伝承や江戸期の兵庫津の状況、当地を訪れた歴史上の人物などが紹介されている。

首塚・胴塚・千人塚—日本人は敗者とうとう向きあつてきたのか 室井康成（洋泉社）

首塚・胴塚・千人塚と呼ばれる塚状の遺跡は、過去の戦争などで亡くなった人々を埋葬した場所、もしくはそう伝承されている場所である。著者の把握するところでは日本全国に六百余あるといい、本書ではその中の一を選び概説している。

神戸市内では長田区の平忠度の^{たのり}胴塚・腕塚や、須磨区にある敦盛塚など源平合戦の敗者を祀ったものが取り上げられている。

これらの塚が建立された経緯の考証とともに記述される、塚にまつわる怪異譚や、さまざまな霊験についての伝承も興味深い。



神戸、書いてどうなるのか 安田謙一（ぴあ株式会社関西支社）

神戸生まれで「ロック漫筆家」を自称する著者が、神戸の食の事、お気に入りの街歩き、今はもうなくなってしまったものなどを、五章に分け、一〇八のエッセイに綴った。登場する場所や店は、人気雑誌には絶対載らないローカルでマニアックなものがほとんど。映画館や音楽の思い出嘶からは、その時代の神戸の風景や雰囲気、浮かび上ってくる。本書のどの頁、どの話題にも神戸愛と思い入れがたつぷり詰まっている。

あしをなくしたウミガメ悠ちゃん—人工ヒレで泳げるように! 中谷詩子（学研プラス）

この本は二〇〇九年から五年間、日本ウミガメ協議会会長亀崎直樹氏を中心に、成功例のなかった人工ヒレの開発に挑んだ人たちの奮闘記である。そのきっかけは、サメに襲われ前足を失ったアカウミガメの悠ちゃん。二〇一〇年須磨海浜水族園園長になった亀崎さんと一緒に悠ちゃんも水族園に引越す。人工ヒレで大海原へと帰って行く悠ちゃんの姿を見たくなる。

防災教育の不思議な力—子ども・学校・地域を愛える 諏訪清二（岩波書店）

著者は、全国初の防災教育専門の学科、「県立舞子高校環境防災科」の設立に尽力し、長く同科長として実践に携わってきた。

前半では、防災教育の目的や力、広がらない理由、語り継ぐことの意味など、防災教育への活発な取り組みが始まってから十余年の間に蓄積された知識と方法が語られる。後半では、次の段階へ進むべく、可能性に満ちた防災教育の未来が示されている。

ラジオ関西10万枚のレコード物語—あの感動をもう一度 今林清志（神戸新聞総合出版センター）

一九五二年の開局以来、洋楽の電話リクエスト放送や、無料レコードコンサートなどを通じ、神戸の音楽文化の一翼を担ってきたラジオ関西。同局が所蔵する一〇万四八〇〇枚のレコードは、須磨にあった旧社屋が大震災で全壊しても、社員の懸命の努力で生き残った。そのコレクションから、秘蔵の名盤、懐かしの名曲を紹介していく「紙上コンサート」。



近世の瀬戸内の湊と渡海船 中川すがね（科学研究所補助金研究成果報告書）

渡海船は、江戸時代、湊と湊を結んだ小型の貨客船である。研究にあたって著者は、近世瀬戸内に存在した湊の確認を行った。基本史料としたのは、『西國海邊巡見記』やその附属絵図『海瀨舟行図』（神戸市立中央図書館所蔵）など。寛文七年（一六六七）の幕府海辺巡見に随行した衣斐蓋子が作者で、船乗りとしての視点から湊の水深・潮流や航路等を記している。本報告書では、それら諸湊の情報を整理・一覧化した「浦々表」を作成、渡海船の活動について考察している。高砂の湊が、金毘羅参詣船の発着場となった過程などが興味深い。

II その他の新刊 II

地震災害と高齢者福祉 阪神淡路と東日本大震災の経験から 峯本佳世子（久美株式会社）

波止ガイド兵庫版（KG情報）

新モラエス案内 もうひとりのラフカ デイオ・ハーン 深沢暁（アルファベータブックス）
マイクロ・ライブラリー 人とまちをつなぐ小さな図書館（学芸出版社）

神戸あんな人こんな人 その⑥

水木 しげる 大正11年（1922年）～平成27年（2015年）

生まれ育ったのは鳥取県境港市で、本名を武良茂むらしげるといいます。学校に遅刻しないことより朝食を食べる方を選ぶというマイペースな少年時代、絵の才能を見出して自信をもたせてくれたのは、画家でもあった教頭先生でした。その尽力により、町中から額縁を借りてきて個展が開かれたこともあります。養護学校在籍の同年同月生まれの山下清が、虫の絵を上手に描く児童として紹介された新聞記事を親子で見て、未来への希望を感じたこともあったそうです。

初めて画業に就いたのが神戸です。従軍中に左腕を失って帰国後、昭和25年ごろに兵庫区水木通みずきどおりに建つ宿屋を「水木荘」と命名して賃貸経営します。そこへ紙芝居絵師が入居してきたのをきっかけに、同じ道へ足を踏み入れます。ペンネームはこの地名に由来しています。しかし、紙芝居人気に陰りが見え始めて一念発起、上京して「貸本漫画家」「雑誌の漫画家」へと転身。昭和40年『テレビくん』で講談社児童漫画賞を受賞後『ゲゲゲの鬼太郎』などの大ヒットで漫画家としての地位が確立されていきます。

昨年11月に93歳で亡くなるまで戦記漫画、妖怪漫画やエッセイなど多くの著作を遺しました。また、妖怪研究者として「世界妖怪会議」を開催するなど、著述以外での活躍も続きました。

ランダム・ウォーク・

イン・コウベ 82

イギリス領事館

イギリス総領事館は現在、大阪にあります。開港当時は、神戸に置かれていました。

慶応三年十二月七日（一八六八年一月一日）に神戸港が開港すると、領事館はまず旧海軍操練所の建物（現中央区加納町六丁目二一の辺り）に開設されました。その後、旧居留地29番へ移転を計画しますが進まず、明治四年（一八七一年）に旧海軍操練所の建物の借用延長を締結し、明治七年（一八七四）になって、旧居留地9番（現中央区海岸通9番地）に建物を新築し、移転しました。周囲の区画は、使用者がめまぐるしく移り変わる中、イギリス領事館は長らく、旧居留地9番にありました。一八七四年に学術調査と病気療養外国人の内地旅行権は部分的に認められたものの、当初、外国人たちは遠方への移動が許されておらず、領事館の仕事は、日本人のイギリスへの渡航の手続きよりは、イギリス人が日本国内を移動するための旅券発行の手続きのほうが多かったように

す。一八八〇〜一八八三年にかけて領事代理として、兵庫・大阪イギリス領事館 (H. B. M.'s consulate for Hiogo and Osaka) に勤務していた W・G・アストンは、手続きの件数が多く、多忙だと嘆いています（桐家重敏『W・G・アストン―日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』）。



J.W.ハート『居留地計画図』一八七二年部分
当館貴重資料デジタルアーカイブスより

パスポート発行の手続きは、まず、領事館に申請し、領事館が署名した書状を添えて県令へ持参します。パスポートはその後、県令から領事館に返送されます。領事館は証明書を封印して申請者に手渡します。旅行終了後、領事館に返還された書類は、

領事がサインした書状をさらに添えて、県令に返さなければなりません。このように、領事館と旅行者双方共に煩雑な手続きが存在していました。

イギリス領事館は、大正期の一八九九年に旧居留地88番に、一九二二年には旧居留地5番（現商船三井ビルディング七階）に、さらに一九三二年に旧居留地72番にあつたクレセントビル（J・H・モーガン設計）に移転しました。

そして一九三八年に完成したチャータード銀行神戸支店ビル三階に領事館は設置され、再び旧居留地9番に戻ってきます。その後、大戦の勃発によってイギリス領事館は閉鎖されますが、戦後の一九四六年、戦前と変更なく、チャータード銀行三階で領事館業務が再開されます（『神戸市史第三集行政編』）。

チャータード銀行はイギリスに本拠を置く銀行です。明治期、横浜に二番目に開設された神戸支店は、一九三八年に新たに旧居留地9番に建物（現チャータードビル）を竣工し営業を開始しますが、戦争の影響で閉鎖されます。その後、台湾銀行が使用しますが、戦後の一九四八年に同所で業務を再開しています。

チャータードビルの外観の意匠の特徴は、平坦で簡素な正面部分によく現れています。一階中央には三本のイオニア式の柱があり、古典的要素が簡素に貼り付けられてはいるものの、非様式建築としての性質を基本としています。なお、南西と南東の角にはレトロな木製の回転ドアが当時のまま残されています。設計は、J・H・モーガンによるものです。建物は国の登録文化財に指定されていて、旧居留地を代表する近代建築のひとつです。現在では、レストランやカフェとして利用されています。

開港以来、神戸に置かれたイギリス領事館は、一九六三年、領事館神戸事務所となり、一九七〇年に大阪総領事館へ併合、廃止となりました。今や多くの領事館が神戸にあつたことは徐々に忘れ去られようとしています。一九六六年当時、二十七カ国の領事館がありました（『神戸商工名鑑』）。かつて各国の領事館として使われた建物や場所を巡ってみてはいかがでしょうか。

参考文献

『神戸市史本編総説』 田井玲子『外国人居留地と神戸』、『兵庫県近代化遺産』 『居留地の窓から 二・四号』